

# 月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第75号 2021年3月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を  
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会  
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
近畿大学教職教育部 富岡研究室  
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 大学の成績評価	山本 剛	2
逸話と世評で綴る女子教育史(75) — 三輪田真佐子と三輪田女学校 —	神辺 靖光	6
東京帝国大学工学部長・丁友会会長俵国一の新入生への告辞 『丁友会雑誌』第7号(1925年)から	谷本 宗生	12
学校資料の教材化を模索して⑨ —「青い目の人形」を活用し た先行授業実践の分析を事例に—	八田 友和	16
明治後期に興った女子の専門学校(30) 女子英学塾の開設	長本 裕子	22
教育史研究のための大学アーカイブズガイド(28) — コロナ禍における大学アーカイブズの現状⑤ —	田中 智子	28
木下広次をめぐる史料(20) — 曾根松太郎『当世人物評』にみる木下広次(2) —	富岡 勝	32
『久徴館』のめざすもの(9) 談話会と一致会	小宮山 道夫	36
体験的文献紹介(23) 実科中学校と実科高等女学校	神辺 靖光	40
刊行要項(2015年6月15日現在)		44
短評・文献紹介		45
会員消息		46

コラム  
大学の成績評価

やまもと たけし  
山本 剛

(有明教育芸術短期大学)

大学教員は、担当科目の成績をどのようにつけているのだろうか。学生のレポートを読みながら、いつも考えることである。本年度はパソコン上での採点のため負担が大きかったので、とくに成

績の評価と査定について思うところがあった。

成績評価の目的は、いうまでもなく、大学教育の質を保証し、学生の学習の理解度を確認して、これからの学習の改善に役立てることにあ

るのだろう。中央教育審議会の答申は、成績評価が個々の教員の裁量に依存されていて、組織的な取組が弱いと指摘した。さらに同答申では、このままでは、大学全入時代の学生の変容で、学生確保という経営上の要請も相まって、なし崩し的に安易な成績評価が広がるおそれがあると危惧した。そこで、「改革の方向」としては、卒業認定における評価も含めて、教員間の共通理解のもと、各授業科目の到達目標や成績評価基準を明確化する等を示唆して、基準に準拠した適正な評価がなされているかなどについて、組織的なチェックが働くような仕組みが必要であると述べた。（「学士課程教育の構築に向けて」中央教育審議会、2008年）

これからの大学教育は、適正な成績評価のために、評価基準を明確化して、毎回のペーパーテスト、討論参加度、口頭テスト、出席率、レポート提出、学生同士の評価など、さまざまな方法を駆使しながら、厳密で適正な評価を行わなければならないのだろうか。

正直に言うと、わたしは、それほど厳密に評価基準を設定しているわけではない。学生のレポートを主観的に読んでいるし、また、だんだん

疲れてくると、あまい評価がさらにあまくなる。

そういえば、日本の大学には、先生の「鬼仏表」などという学生からの評価がある。(北海道大学大学文書館「編集ニュース第3号 2019年7月31日参照)また、竹内洋氏の回想にある次のような先生は、現在の大学にはいるのだろうか。「どこの大学にもホトケの〇〇教授がいた。私が学んだ大学にもいた。単位が足りなくなると、学生はこの先生の研究室を訪れる。先生は説教がましいことは何も言わない。先生は、ただ次のことだけを言った。『よろしい。分かりました。で、何点欲しいのですか』。学年末になると成績表にはちゃんと学生が『希望』したとおりの点数がついていた。」(竹内洋『大衆の幻像』(中央公論新社、2014年、232頁)

さて、日本の大学の成績評価は、大正期の半ばに、100点満点の素点方式の点数制から、A・B・C・Dの段階方式による評価表示に変わった。

どうして、日本の大学では、100点満点の素点方式がとられなくなったのか、試験の成績を点数で評価することでどのようなマイナスの側面をもたらすことになったのか。

1918(大正7)年3月末から4月末にかけての東京帝国大学学内における帝国大学制度調査委員会での論議、すなわち「学年学級制の廃止」、「優等生制度の廃止」、「点数制」から「段階制」への評価制度改革などの大学改革論議、そして、1917(大正6)年9月から1919(大正8)年3月までの間に設置された臨時教育会議での成績評価に関する論議は、現在でも考えさせられることが多い。

例えば、臨時教育会議の答申や付帯の「希望事項」を読んでもと、大学教育の本質的な主張がみえる。すなわち、「試験ハ其ノ成績ヲ点数ニ依リテ評価スルノ例ヲ廃セムコトヲ望ム」。大学とは、「學術ノ攻究ヲ目的トスルヲ以テ学生自ラ學術ヲ研究スルノ風」がなくてはならない。

「試験ノ成績ヲ点数ニ依リテ評定スルトキハ学生ノ得点ニノミ汲ヲシテ自学自修ノ気風」がなくなる。「教授ノ講義ヲ聴聞筆記シ之ヲ暗記シ試験ニ及第」することに終始してはならない。「自修独創ノ学風ノ不振ヲ来セルハ大学教育上ノ一大欠点」である。したがって、「受動的学習ノ風ヲ改新シ学生ヲシテ教授指導ノ下ニ自ラ學術ヲ研究セシムルノ方針」のために、「点数ニ依リテ成績ヲ評定スルカ如キ制ヲ廃セラレムコトヲ望ム」のである。（『資料 臨時教育会議』第1集）

学生の「自修」「独創」を徹底するために、成績評価の方針は、点数制の素点方式を廃止するのである。なお、1926年の東京帝国大学の学友会学生委員会は、この評価の方式でも不徹底だとして、「合格」、「不合格」の二評点制の採用を請願していることは確認しておきたい。（寺崎昌男「成績と評価—『優良可』方式はどうして始まったか」『東京大学の歴史』2007年、講談社学術文庫、167頁）

安易な成績評価が広がるおそれがあるとして、成績評価基準を明確化することは「改革の方向」として正しいのか、さらには卒業認定も「第三者機関による統一資格試験を導入して、科目ごとに修得すべき知識の範囲を定義し、それに基づいた共通の教科書を作り、それを基準とした資格認定試験を実施して、その成績に応じて資格を与えるという仕組み」にするという意見もあるなかで（潮木守一『大学再生への具体像』2006年、東信堂、216頁）、大学教員は担当科目の成績をどのようにつけるのか、大学の歴史を問い直してみる必要がある。

#### 参考文献

竹内洋『大衆の幻像』（中央公論新社、2014年）。

潮木 守一『大学再生への具体像』（東信堂、2006年）。

寺崎昌男『東京大学の歴史』（講談社、2007年）。

『資料 臨時教育会議』第1集。

北海道大学大学文書館 「編集ニュース 第3号 2019年7月31日」

[https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/hu150\\_publication\\_s.html](https://www.hokudai.ac.jp/bunsyo/hu150_publication_s.html)（閲覧日2021年3月15日）。

京都大学高等教育研究開発推進センター「教育アセスメント」  
<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/>（閲覧日2021年3月15日）。

「学士課程教育の構築に向けて（答申）」文部科学省  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm)（閲覧日2021年3月15日）。

\*このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。

## 逸話と世評で綴る女子教育史(75)

### — 三輪田真佐子と三輪田女学校 —

かんべ やすみつ  
神辺 靖光(ニューズレター同人)

三輪田女学校は明治35年4月、東京市麴町区4番町に開校した。同年2月26日の読売新聞にそれを予告する記事がある。

女子教育家三輪田まさ子女史は多年経験の結果完全なる人格の女子を作らんには身を以て感化の任に当るに若かずとて今回在来の家塾を拡張して三輪田女学校と言うを麴町区四番町に設立する計画にて目下設計中なるが、総坪九百餘坪、経費五万円にて来月四月十日より仮校舎にて開校し全部の完成は来年四月なりと。

女子教育家としての三輪田真佐子が広く知られていたこと、すでに女学校の前身になる家塾を開いていたことがわかる。

三輪田真佐子は天保14(1813)年、京都に生まれた。儒学者を父に持つ真佐子は幼少の頃から儒学を学び、詩歌文章をよくした。12歳の時、陽明学者で詩人の梁川星巖・紅蘭夫妻の門下生になった。慶応3年、岩倉具視の息女の教育を担当、明治元年には岩倉家の内殿侍講を兼ねて、明治天皇妃(皇后)の和歌の添削指導係となる。明治2年、26歳の時、伊予松山藩の尊攘派志士、三輪田元綱と結婚した。元綱は病弱で長く患い明治12年、多くの借財を残して没した。真佐子は借財を苦心して返済したので無一文になった。そこで松山に明倫学舎という私塾を開いて漢学を教えた。明倫学舎は教え方がよいというので名



創立者 三輪田 真佐子

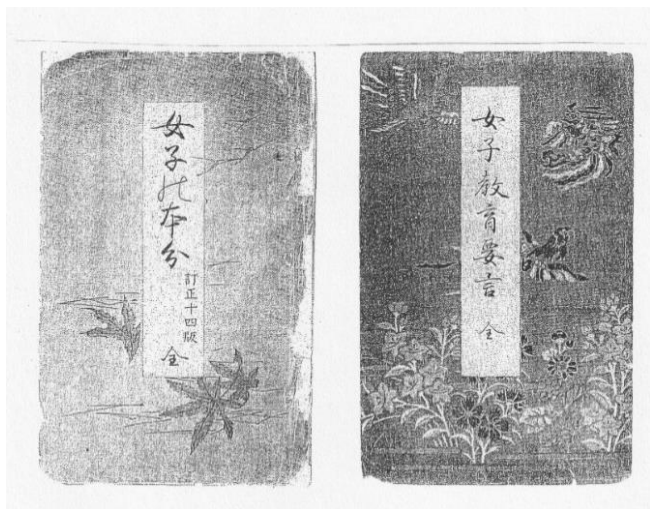
声があがった。それを伝え聞いた愛媛県令関新平は真佐子を愛媛県師範学校の漢文教師にした。真佐子には4人の子どもがあったが3人は夭折し、一人だけ生き残った。その一子元孝の教育のために真佐子は明治20年、東京にでて新しい生活をたてることにした。そこで学生の多い神田東松下町に翠松学舎という私塾を開いた。生徒が忽ち集り女生徒もいたので男子部と女子部に分け、漢学のほかに英語・数学を教えた。英学と数学は彼女が独学で学んだものである。こうして真佐子は生計をたてることができたが、不幸、一子元孝が病死した。真佐子は悲嘆にくれたが、数年後、懇意にしていた英吉利法律学校（現中央大学）の生徒・山下富五郎と養子縁組し、富五郎は三輪田元道と改称した。元道は香川県豊田郡の生れであるが11歳のとき、松山の明倫学舎の盛名を聞き、入塾、三輪田真佐子の薫陶を受けた。彼は向学心止み難く上京して英吉利法律学校に学ぶ傍ら旧師の真佐子に親炙しんしやしていたのである。真佐子は彼にさらなる向学をすすめ、彼もそれに応えて第一高等中学校から帝国大学哲学科へ進み、大学院で社会学を研究した。そして、真佐子が三輪田女学校を開設するや教頭になって終生これに尽くすのである。



教頭 三輪田 元道

さて、神田東松下町の翠松学舎は生徒が集ったというが女子が多かったのか明治23年には男子部を閉鎖して女子だけの私塾にした。その頃の教育課程表を見ると3年制で学科は英語（綴字、読方、訳読、書取、洋算術、文法、会話）、漢学（修身、読方、解義、習字）、唱歌音楽、裁縫編物、諸礼からなる。英語は3年間で78時間で英語に力を入れていた。音楽にオルガン演奏があり礼法も西洋礼法が半ばを占める。

生徒は昼間夜間各50名ぐらいだったというが、この学科を真佐子を入れて7名の教師が教えた。いずれも第一高等中学校や慶應義塾等で勉強中の者であった。このうち4名もが愛媛県師範学校の出身者で数年小学校の教員をした後、上京したという。真佐子が愛媛県師範学校で教えた因縁であろう。いずれも真佐子を慕ってのことである。真佐子は翠松学舎で教える傍ら東京の各女学校から招かれて教壇に立った。23年から東京音楽学校（現東京芸大）で文学講義、東京府高等女学校（府立第一高女）で漢文授業、34年から日本女子大学で漢文講義という具合である。女流漢学者として三輪田真佐子の名は東京に鳴り渡っていったのである。こうした活躍と平行して真佐子は27年『女子の本分』、30年『女子教育要言』を刊行した。その要旨は良妻賢母主義を主張しながらも家だけに閉ち込まれることなく国家社会の一員たることを自覚せよというものであった。かくして三輪田真佐子はこの翠松学舎時代に女流学者というだけでなく女子教育者として名があがったのである。



日清戦争勝利による国民意識の高騰、賠償金獲得による景気の上昇、中学校令・高等女学校令・実業学校令の制定等によって中等学校の設置が多くなった。機をみるに敏な真佐子が高等女学校開設を決心したのは明治33年の頃であった。決心すると直ちに神田小川町同錦



町の住宅を売り払い、これまで節約して貯めた金額を合わせて5万円を捻出した。外濠の内側にあるこの<sup>あた</sup>辺りは旗本屋敷が立ち並んだところである。維新の動乱で気骨のある旗本は関東奥羽蝦夷地で戦ったり静岡に移ったりしたが江戸の享楽文化に<sup>な</sup>馴染んだ旗本の多くはこの旗本屋敷で遊芸に<sup>ま</sup>更けていた。明治9年、金禄公債の条例が出ると支給されたわずかな現金と秩禄公債で生計をたてねばならなくなったが、士族の商法で没落、家屋敷を売らねばならなくなった。真佐子が上京した頃は旧旗本の没落が極まった頃で神田周辺の旗本屋敷は廉価で買うことができた。それでかなり広い土地屋敷を買っておいたのであろう。然るにそれから十餘年、東京は新しい産業商売が興り景気がよくなった。そこでその屋敷土地を売った5万円という大金を手にしたと思う。若い時から貧困を経験した真佐子はこうした才覚も持っていたのである。

新しい学校建設について独立の精神で寄付は募らなかった。たまたま近くの麴町4番町（現千代田区九段北3丁目）に約800坪の売地があったのでこれを購入した。こうして準備が整った35年3月、真佐子は「私立学校設置認可願」を東京府知事に提出し認可された。「高等女学校令ノ学科及其程度」（文部省令7号）に則り5年制で修身以下の学科目が並べられている。外国語は英語で随意科目は漢文である。校長は三輪田真佐子、教頭・三輪田元道であるが、この場合の教頭は現在言う教頭ではなく学校経営一切の責任者であった。数人の教員を雇ったが女教員が多い。その学歴をみると英語は女子英学塾（現津田塾大学）、国語漢文は女高師（現お茶の水大）地理も女高師、体操は東京女子体操音楽学校（現東京女子体育大）、男性教員も数学と理科は高等師範学校の卒業生で当時最高の教員養成学校の出身者であった。生徒定員は創立の35年は300名、年々100名ずつ増加して37年には500名になった。束脩（入学金）1円、授業料（月謝）1円で

ある。東京の中流階級からみればほどよい価格であった。39年のある記録に三輪田高女480名中、父兄の職業、陸海軍人・将官13人、佐官90人、また上級官吏、教育家が多いとある。開校早々、三輪田高女は東京の新知識階層から支持されたのである。良妻賢母主義を謳った女学校だから上級学校進学を推めたわけでないのに37年の第1回卒業生に23名もの進学者があった。日本女子大学校18名、東京女子高等師範学校3名、女子英学塾2名である。三輪田高女卒業生の学力の高さが窺える。東京の文教地の中心という立地条件のよさと女子中等教育への進学熱の高まりという好条件に恵まれて三輪高女は開校当初から入学希望者が多かった。定員を更新しながらも定員はすぐに埋まった。大正4年の調査だが募集人員150人に対して467人の志願者があり入学者180人で倍率2.6である。5年後の大正9年には志願者1055人、入学者155人で倍率6.8になった。

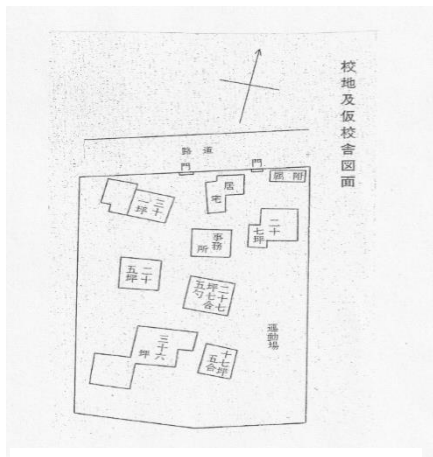
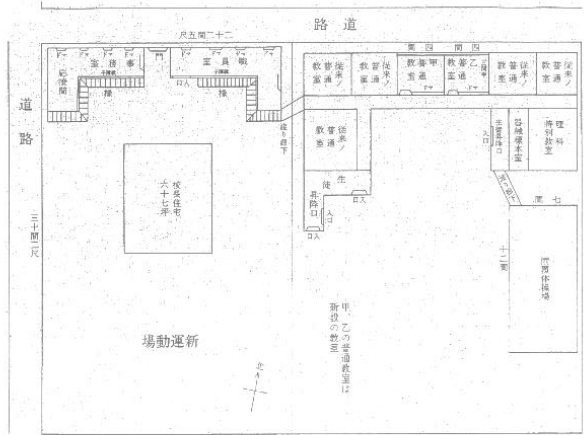


図 A

生徒の増員につれて校舎の増築が必須になった。開校当初の仮校舎は800坪の校地に8棟の建物が散在したもので(図A参照)、これを校長住宅、教員室、事務室、教室に振り分けたものであった。定員が600名になろうとする38年から計画をたて39年、校地に隣接する旧旗本屋敷を購入した。そこには旧式の武家門があったがそれを移築して学校の正門とし、周囲の長屋部分を改築して普通教室にし、以後年々音楽室、割烹室、理科室をつくり大正2年、雨天体操場をつくって完成した。

課外活動としての遠足や修学旅行はすでに高等女学校一般に行事化しており当校も行った。校友会雑誌も年2回発行した。日露戦争に際しては軍人の子女が多かった故か校友会活動として生徒一人につき毛系の靴下一足ずつ作り計500足を海軍経理部に寄贈した。かくして三輪田高女は大正昭和に向けて生生発展の道を辿るのである。明治45年3月、三輪田真佐子は勲六等宝冠章を授与された。



参考文献

- 『三輪田学園百年史』
- 『写真集・三輪田学園百年の歩み』
- 『三輪田学園110年のあゆみ』

# 東京帝国大学工学部長・丁友会会長俵国一の新入生 への告辞 — 『丁友会雑誌』第7号(1925年)から —

たにもと むねお

谷本 宗生(大東文化大学)

このたび古書店より廉価にて、書誌データ・サイトCiNiiでも現存されていないという、東京帝国大学学友会丁友会『丁友会雑誌』の1冊である、第7号(1925年、全148頁)を幸いにも入手することが出来た。丁友会は、東京帝国大学工学部教職員・工学部在學生・工学部卒業生らを対象会員とした東京帝国大学学友会の1つであり、工学部長をその会長としている。この『丁友会雑誌』第7号(1925年)巻頭に掲載されている、工学部長・丁友会会長の俵国一(生1872～没1958年)による、新入学生への告辞(1925年4月)を紹介したい。

まず俵国一については、小学館『日本大百科全書』(コトバンク)によれば、「鉄冶金学者。1872年、島根県浜田に生まれる。1897(明治30)年、帝国大学工科大学採鉱冶金学科卒業。ドイツのフライベルク鉱山大学留学を経て、1902(明治35)年、母校の教授に就任、以来1932(昭和7)年の停年退官まで鉄冶金学講座を担当した。この間、工学部長にも選ばれ、総合的な科学としての工学の研究、教育活動に尽くした。日本に初めて大形金属顕微鏡を導入して金属組織学の方法を確立し、東北帝国大学の本多光太郎に協力して金属工学の発展に寄与したほか、古来の砂鉄製錬法ならびに日本刀の科学的研究など、技術史分野の開拓で知られている。1921(大正10)年帝国学士院賞、1946(昭和21)年文化勲章を受けた」と評され、帝大工学部・工業界の科学化促進に尽力貢献した主要人物の一人といえよう。

工学部長の俵は、新入学生らに対して、「本年は三百二十五名と言ふ多数を本学部を迎へた…諸君は今日迄永年予備教育をうけてここに入学した、殊に諸君の多数は入学に際して相当嚴重なる試験をうけ、

入学の榮譽を得られたるは洵に慶福する次第である。抑諸君の工学に志した其動機は種々ならんが、我が一身を工業界に投じて、要は身を立て家を起し、本邦工業の発展に資し、国運の隆盛を計り、惹ては世界人類の上に貢献する所あらんが為と思ふ、それであるから諸君は入学試験をうけた当時と同じ精神意気込を以て、ここ三年間努力し卒業後も同様の精神を以て、我が工業界の為に尽して貰いたいのである」と訴えている(1~2頁)。

さらに工学部の新規模実施の趣旨について、「四つの大きな方針を確立してある、第一は工業に関する基礎学に重きを置く事、第二は学修を一定型に拮制せしめざること、第三は必修科目をなるべく減少し学生をして学修に自由ならしむること、第四は各研究機関の価値を發揮せしむることである、旧規程たりとも、此四大方針に基きて作製せられたものに外ならないが、新規程にありては一層具体的に之を実行し得る様に、即ち理想に近づき得る様に勉めたのである…先に我工学部には十一学科を設け、各々其授業科目中に必修、選択、及参考の三種を置き、学生が履修すべき課程を設けた、新規模の要領は従来の授業科目を一括して之を単位制度とした、在学中学生は自由に之等を選択し、其の中四十単位以上を履修することになった、その外論文試験に合格すれば卒業し得る事になる…即ち諸君の学修は諸君の自発的であらねばならない、一定の型に入れた他働的ではいけないのである、自か[ママ]ら自己の思ふ所を決定し、自ら之を修むることを必要とする」と強調している(2~3頁)。

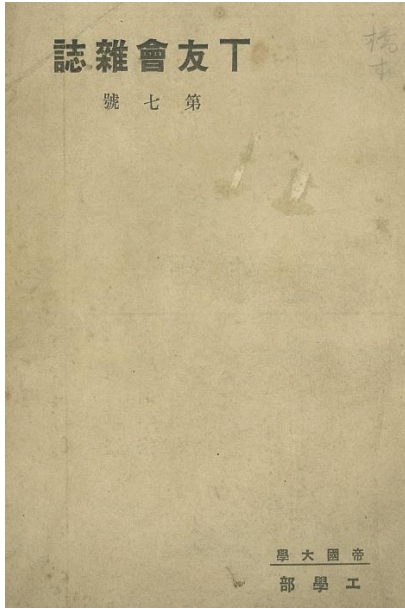
在学生のなかには「他日海陸軍、逡信方面に就職せんとする者」もあり、「其当局に於て夫々履修すべき科目」の要請もあって、「諸君は其履修すべき科目を選択するに当り、先づ自ら志す目的を定めた上に、各学科の主任教授及其他の教官に相談する必要がある」として、進路選択と履修科目の関係には相応の注意を払うよう、新入学生らに適切

な助言を与えている(4頁)。さらに、大学出身者らには「実地経験に劣れるといふ非難」があり、「諸君は夏期休業中は実地演習を必ず履修し、又学内に於ては実験、実習、製図及演習等を履修して」もらいたいと述べている(4頁)。

期待と不安もいまだ交じる新入学生に対して、「我が帝国大学に学友会がある、諸君は御互に其主旨に基いて全部入会する事を希望する、亦我工学部にも支部として丁友会がある大に之等を利用されたい。尚授業時間の改正とか学資金の貸与等は工学部の掲示場に其時々に出るのである、不絶注意して見て貰ひたい」と、教育者としてだけでなく工学の道へ進む先輩として、細やかな配慮も十分に示している(7頁)。

同号巻末に掲げられた編集後記ともいべき「六號雑記」にも、「俵[工学]部長が大英断を以て、かなりの反対にも拘らず、数年来の抱負と懸案を断行されたことは我工学部の為のみならず我工業界の為にも時勢に適応した処置として祝すべきことと云はねばならぬ。吾々は少々の手続の繁鎖のためにその精神を捨つべきでない。従来、画一教育個性を没却された教育と思惟されていたことから、今次の改制によりて、幾分救はれたことを喜ぶべきである。当然喜ぶ可きである」と、学生側の声もことさら強調しているのである(148頁)。

※左下写真：丁友会雑誌第7号表紙



※右下写真：同7号目次

丁友会雑誌目次

大正三十四年四月八日新入學堂に對する告辭…………… 飯 岡 一 (一〇)

技師家と社會…………… 角田 正 幸 (一五)

工業と藝術家の國家前任務…………… 加 藤 正 幸 (二五)

計數表の話…………… 寺 澤 賢 一 (三〇)

電氣探査に關する種々な方式に就て…………… 上 野 忠 三 (三八)

旭島北麓に就て…………… 永 廣 兼 二 (四三)

論詩會演藝並演習者…………… (五三)

遊 記……………	飯 岡 一 (一〇)
社 説……………	角田 正 幸 (一五)
丁友會記事……………	加 藤 正 幸 (二五)
出 産……………	寺 澤 賢 一 (三〇)
白 木 蘭……………	上 野 忠 三 (三八)
勞働は希望に……………	永 廣 兼 二 (四三)
至り對するまで……………	(五三)
六義雜記……………	

## 学校資料の教材化を模索して⑱

－「青い目の人形」を活用した先行授業実践の分析を事例に－

はった ともかず  
八田 友和（クラーク記念国際高等学校）

### 1. はじめに

本稿では、学校資料を活用した先行授業実践を取り上げ、授業分析をすることで、学校資料を活用した授業の問題点を明らかにしたいと考えている。そこで本稿では、「青い目の人形」を活用した先行授業実践を2例取り上げ、授業実践の概要を整理したのち、授業分析を行う。

### 2. 青い目の人形とは<sup>1)</sup>

昭和2（1927）年、世界児童親善会より、日本の子どもたちに12739体の「青い目の人形（アメリカでは「友情の人形」と呼ばれていた）」が送られた（資料1）。



（資料1）青い目の人形（出典：『戦争と大津』p.2）

この取り組みは、日本に対する理解が深い、アメリカ人宣教師のシドニー・ルイス・ギュリック博士が企画したもので、アメリカ国内で起きていた日本移民排斥運動解決の糸口を探るものでもあった（日米親



善の精神を子どもたちの交流によって育てようという考えがあった)。なお、「青い目の人形」には、一体ずつパスポートが添えられており、一体一体名前や出身地、目の色などの特徴が記されていた。一方で、日本からもお礼の気持ちを込めた日本人形(市松人形)58体が「答礼人形」として送られている。なお、日本の人形にも「ミス滋賀県」など、都道府県名が付けられた。青い目の人形は全国各地に届けられ、日本においては各地で熱烈な歓迎が行われ(資料2)、各地の学校園などで大切に保管されることになった。



(資料2) 京都駅にて、人形の出迎えが行われている様子

(出典:『図録 近代日本の道徳教育』p.38)

しかし、1941(昭和16)年よりはじまった太平洋戦争により、日米関係は悪化の一途をたどり、各地で人形の処分が行われるようになる(資料3)。また、新聞記事においても、「青い眼をした人形、憎い敵だ許さんぞ」という記事が載せられ、人形を壊したり、焼いてしまう行為が頻発することになる。終戦後、全国各地で生き残っていた青い目の人形が発見されるが、その数は300体にとどまっている。

### 3. 先行授業実践の分析

本研究では、先行授業実践として、稲垣尚宏氏の実践および西村和貴氏の実践を取り上げ、分析を行う。

稲垣氏の実践は、総合的な学習の時間における取り組みで、長崎修学旅行を大きな機会として捉えて実践されている。本実践では、「戦争中に「青い目の人形」の多くが処分されたが、少ないながらも守り通された人形があったことを知り、人形に込められた人々のやさしさに思いを寄せることができる」ことを目標に実践されている。実践では、日本に届けられた「青い目の人形」の概要について整理したのち、中心発問の「友情の人形」「青い目の人形」は戦争中にどうなったのだろうを問い、当時の子どもたちが人形に対しどのような考えをもったのかを整理させている。そして、授業の終結部において、学習の感想を書き、戦争中にほとんどの人形が処分されたが、300体以上の人形が残されたことに触れている。児童の感想として、「私だったら、戦争と人形は関係ないから、こっそり人形をとっておきたいです」「私は、人形に、こわしたり、毎日いじめたりしろって言う人たちがバカだと思いました。」などがまとめられていた。

次に、西村和貴氏の実践を分析する。本実践では、デジタルストーリーテリング（以下、DST）という手法を用いて「青い目の人形」を調べ、まとめる活動を行っている。この実践における、DSTのストーリー作りは、教員による支援が行われず、班での主体的な活動に重きが置かれている（アクティブ・ラーニングによる授業進行が図られているという特長がある）。一方で、生徒の興味関心に応じてDSTがまとめられているため、十分に取上げられている部分とそうでない部分があることも確かである。よって、「気づいてほしい」または、「習得しなければならぬ部分」については、教員から、ある程度の提示を行うことも必要だ

と考えている。また、2つの実践における共通の課題として、感情を吐露することにとどまっているという点が指摘できる。当時を生きた子どもたちの価値観や社会情勢を学習していない（少なくとも指導案などでは確認ができない）ため、先述のような感情の吐露にとどまったことが想像できる。例えば、当時の社会情勢に加えて、子どもたちが置かれた立場や現実を提示することで、感情の吐露にとどまらない実践を目指すことができると考える。

#### 4. おわりに

本稿では、「青い目の人形」を活用した先行授業実践の概要を整理し、授業分析を行った。今後も学校資料を活用した先行授業実践の収集を行い、授業分析を行うなかで、学校資料を活用した授業実践の特質と課題を明らかにしていきたいと考えている。

#### 【謝辞】

本稿を執筆するにあたり、クラーク記念国際高等学校の石川真椰氏にお世話になりました。記して御礼申し上げます。

#### 【註】

1) 『戦争と大津』pp.2-5 を参照して執筆している。

#### 【参考文献】

- ・稲垣尚宏「友情の人形「青い目の人形」-総合的な学習「平和への旅」」『地理歴史教育(808)』歴史教育者協議会 pp.44-47
- ・斉藤利彦 2019『「誉れの子」と戦争-愛国プロパガンダと子どもたち』中央公論新社
- ・村野正景・和崎光太郎(編)2019『みんなで活かせる!学校資料-

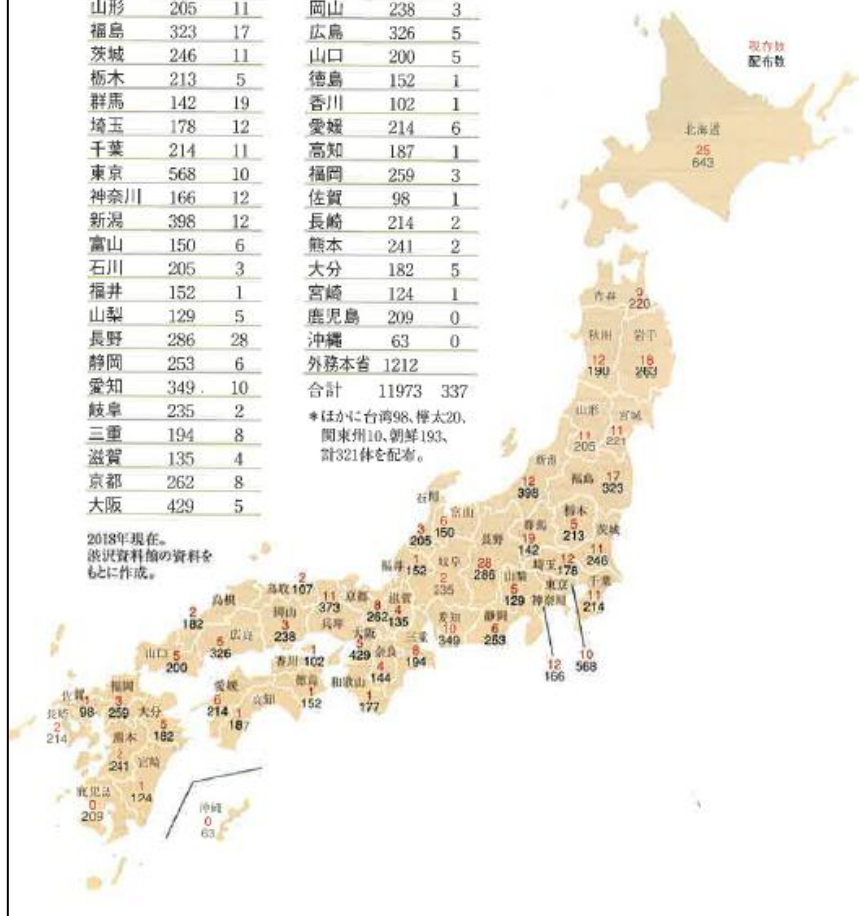
学校資料活用ハンドブック』学校資料研究会

- ・島田雄介・神野晋作・八田友和 2018「学校所在資料の活用～学校現場に聴く～」『考古学研究』第64巻3号, pp.10-19
- ・西村和貴・下村勉・須曾野仁志 2012「ICTを用いた能動的な学習「青い目の人形とミス三重」の実践的効果の検討」『日本教育工学会論文誌36』pp.129-132、日本教育工学会
- ・西村恭子 2018『青い目の人形 メリーの旅』神戸新聞総合出版センター
- ・大津市歴史博物館(編)2014『戦争と大津－激動の時代と子どもたち－』大津市歴史博物館
- ・京都市学校歴史博物館(編)2018『図録 近代日本の道徳教育』京都市学校歴史博物館
- ・文部科学省 2019『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説－地理歴史編－』東洋館出版社

## ●「青い目の人形」(友情人形)の配布数と現存数

都道府県	配布数	現存数	都道府県	配布数	現存数
北海道	643	25	兵庫	373	11
青森	220	9	奈良	144	4
岩手	263	18	和歌山	177	1
宮城	221	11	鳥取	107	2
秋田	190	12	島根	182	2
山形	205	11	岡山	238	3
福島	323	17	広島	326	5
茨城	246	11	山口	200	5
栃木	213	5	徳島	152	1
群馬	142	19	香川	102	1
埼玉	178	12	愛媛	214	6
千葉	214	11	高知	187	1
東京	568	10	福岡	259	3
神奈川	166	12	佐賀	98	1
新潟	398	12	長崎	214	2
富山	150	6	熊本	241	2
石川	205	3	大分	182	5
福井	152	1	宮崎	124	1
山梨	129	5	鹿児島	209	0
長野	286	28	沖縄	63	0
静岡	253	6	外務本省	1212	
愛知	349	10	合計	11973	337
岐阜	235	2			
三重	194	8			
滋賀	135	4			
京都	262	8			
大阪	429	5			

2018年現在。  
滋賀資料館の資料を  
もとに作成。



資料3 「青い目の人形」の配布数と現存数

(出典)『青い目の人形 メリーの旅』p.37

## 明治後期に興った女子の専門学校(30)

### 女子英学塾の開設

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

明治33年春、開校の時には手伝うと約束していたアリス・ベーコンが来日した。桜井彦一郎(翻訳家、小説家)、鈴木歌子(華族女学校での津田梅子の教え子)など数名の教師を依頼した。大山巖侯爵夫人捨松が顧問を引き受け、友人の新渡戸稲造(英文『武士道』著、後に第一高等学校校長)、元田作之進(聖公会の司祭、立教学院中学校校長)、義兄上野栄三郎(実業家)らが協力した。桜井は、父津田仙の知り合いで、学農社農学校出身の巖本善治(明治女学校校長)の推薦もあって教師に招かれ、幹事として創立の実務を担当した。「女子英学塾」の名称は桜井がつけた。「学校」とせず、前時代を思わせる「塾」としたのは、“小さな学校から始める。教育は教師と生徒の人格の触れあいの中で育まれる。”という梅子の意を酌んだのであろう。

33年9月、「私立学校令」により、東京市麹町区一番町において、女子英学塾が開設された。

学則第一章主旨の第一条に、

本塾は婦人の英学を専修せんとする者並に英語教員を志望する者に対し必要の学科を教授するを目的とす但し



女子英学塾最初の校舎前庭にて  
(『津田塾大学100年史』)

教員志望者には文部省検定試験に必ずべき学力を修得せしむ  
(『津田英学塾四十年史』)

とある。英学を専門に学ばせ、英語教員の養成を目的とした。

9月14日、開校式が行われた。校舎といっても普通の住宅を借り受けたもので、式は10畳の座敷で行われた。参列者は17名。新入生10名、顧問の捨松ほか数名の教師であった。式は、勅語奉読、讚美歌、祈祷、聖書(英語)、開塾主旨(塾長)、君が代唱歌という次第であった。この勅語奉読に始まり、君が代唱歌で終わる形式は、華族女学校や女子高等師範学校での形式だった。梅子はそれに、讚美歌や祈祷、聖書を読むという基督教的なものを加えた。学則に「基督教の精神に基づく教育を行う」とは謳わなかった。32年8月公布の「文部省訓令十二号」で宗教教育が禁止されたことを意識したのだろう。しかし、クリスチャンである梅子が、基督教の教えを人格教育の基本に据えたことはいうまでもない。

梅子は英文の原稿を手にして、日本語で開塾の主旨を述べた。概略しよう。

本当の教育は、立派な校舎や設備がなくても出来る。教育に大切なことは、教師の資格と熱心と学生の研究心である。教授方法や訓練は生徒一人ひとりの特質にじっくりあてはまるように仕向けなくてはならない。それには少人数に限る。

自分は不思議な運命で幼いころ米国留学をして、日本の女子教育に尽くしたいという考えを持って帰国した。しかし、当時は働く学校もなく、学んだ知識を実際に応用する機会もなかった。英学

塾は、目的の一つとして、英語教師の免許状を得ようと望む人々のために、確かな指導を与えたい。

“少人数により個々の特質に応じた訓育を施す” “希望者には教員検定試験の難関を突破するための指導をする”と、梅子の理念と目的が語られた。

33年3月「教員免許令」が制定され、次いで6月「教員検定ニ関スル規程」が定められた。当時、青山女学院の高等科を初めミッション・スクールなどで英語を専修させる女学校があったが、検定試験に応じられるレベルには至っていなかった。唯一の高等教育機関である女子高等師範学校には英文科がなかった。高等女学校が増え、今後ますます必要になるとされる英語の教員として、女性の社会的・職業的進出の道を拓こうというのが梅子の目的であった。

学則第一章第二条に、

本塾の組織は主として家庭の薫陶を旨とし塾長及び教師は生徒と同住して日夕の温育感化に力め又広く内外の事情に通じ品性高尚に体質健全なる婦人を養成せん事を期す但し生徒の都合により特に通学を許可する事あるべし(『津田英学塾四十年史』)

とある。寄宿舎に教員と生徒が一緒に住み、日夜家庭でなされるような訓育を通して、見識を広め、品性を備え、健康な女性を養成すると謳った。米国で梅子が受けた教育は、いずれも小規模の学校であった。その行き届いた教育、また、ランメン家や伊藤博文家で受けたような家族団欒の中で恩愛を施したいと考えたのであろう。開塾の主旨にその思いが続く。



専門の学問を学ぶと考えが狭くなる。完全な婦人 (allround women) となるのに必要な世間一般の事柄をゆるがせにはいけない。

この塾は女子に専門教育を与える最初の学校である。世間はささいな日常の言葉遣いや他人との交際振り、礼儀作法、服装などで全体の価値を定めようとする。くだらない世評に上らないように気を付けてほしい。

専門の英語の学習は深く学ぶ。しかしそれだけに偏らず、どの方面にも一通りの知識を持ち、常識を備えた教養ある女性をめざす。「完全な婦人」とはそういうことであろう。そのために毎週金曜日は課外授業として、明治女学校校長巖本善治の道話 (隔週)、アリス・ベーコンの時事問題や新渡戸稲造の『武士道』の特別講演などを聴く。希望者には音楽、絵画も教える。礼儀作法や服装なども注意していくという。梅子と、叔母の須藤八重野が熱心に指導した。八重野は、江戸末期に御殿勤めの経験を持ち、書道、歌道、茶道をたしなみ、土曜日には裁縫も教えた。

学科は、本科及び撰科とした。入学資格は、“満15歳以上の女子で高等女学校または師範学校を卒業した者、もしくはこれと同等の学力を有する者、かつ第四リーダーを習読しこれに相当する会話文法等の素養ある者に限る”とした。英学の力が足りない者のために予備科 (2ケ年) を設けた。本科生と同等の学力ある者で、1、2の学科を選んで修学を望む者は撰科生として入学を許可した。

本科の修業年限は3ケ年。3学期制で、授業時間は1日3時間。<sup>そくしゅう</sup>束脩2円、月謝2円、賄費6円、塾費夏期1円冬期1円50銭。

学科課程は以下の通り。数字は1週間の授業時間数を示す。

#### 必修科

- 1年 英語(読方・作文・会話)5、英語(文法・訳読・綴字)5  
2年 英語(訳読・文法)和文英訳5、英語(会話・作文)2、  
英文学(散文)3、心理学(国語)3<3学期は教育学>  
3年 講読・英文学5、作文・修辞学3、英文学史3、  
英語教授法2<2学期は和文英訳、3学期なし>

#### 撰修科

- 1年 国語・作文3、漢文3、古代史(英文)2、  
近代史(英文)2  
2年 英文学(詩)2、歴史(英文)2、  
3年 英文学(詩)2<3学期は心理学(英文)>、歴史(英文)2  
必修科に撰修科を加えて1週間の授業時数はおおよそ15、6時間。他校のおおよそ半分である。予習をしっかりとさせて授業に臨ませるといふ梅子のねらいがあった。

“先生は何事もいい加減な事が嫌いで、生徒が辞書をいい加減にひき、あとは先生に聞くというような態度は好まなかった。自分で辞書の隅から隅まで探し、適訳を見つけて教室へ出る事を要求した。”(明治34年4月入学の西木政枝談)という。梅子はいくまでも生徒の研究心を尊重し、自発的な学習を徹底して課した。時間数は少なかったが、撰修科目も大半が英文のテキストを用い程度はかなり高かった。

梅子は入学試験で、読み・書き・話しをさせて、クラスを決めた。よく出来る分野については飛び級をさせ、力不足の場合は繰り返し履修させた。開校式で述べた“一人ひとりの特質にあてはまるように”教授し

た。正月休みを終えると6人が来なくなった。授業の厳しさについていけなくなった者もいたであろう。去る者は追わなかった。寄宿生ははじめ2人であったが、暮れには4、5人に増えた。34年3月には30人余りになり、校舎を増やす必要に迫られた。

#### 参考文献

『津田梅子』吉川利一

『津田英学塾四十年史』

『津田塾六十年史』

『津田塾大学100年史』

## 教育史研究のための大学アーカイブズガイド(28)

### — コロナ禍における大学アーカイブズの現状⑤ —

たなか さとこ

田中 智子(早稲田大学大学史資料センター)

これまで過去4回、国立公文書館等指定の国立大学アーカイブズ、および私立大学アーカイブズについて述べてきた。5回目の今回は、国立公文書館等に指定されていない国立大学アーカイブズのうち、(1)お茶の水女子大学歴史資料館、(2)金沢大学資料館、(3)熊本大学文書館、(4)東京藝術大学音楽学部大学史史料室の状況について紹介していく。

#### (1)お茶の水女子大学歴史資料館

本ニューズレター第54号で紹介した通り、お茶の水女子大学歴史資料館は展示施設とアーカイブズ施設が一体となった機関である。同館の展示は元々、ホームカミングディ、オープンキャンパス、その他特別公開期間を除き事前予約制となっていたが、2020年4月7日、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、当面の間閉館することとなった。また事務体制を縮小し、資料の閲覧、複写、撮影、出版物への掲載申請および貸出し業務を一時停止とした。1回目の緊急事態宣言の解除に伴い、同年6月3日には出版物への掲載申請の受付を再開したものの、展示施設は引き続き閉館し、資料の閲覧、複写、撮影および現物の貸出し業務の一時停止も継続となった。同館の最新情報については、下記ホームページを参照していただきたい。

<https://www.lib.ocha.ac.jp/archives/news.html>

#### (2)金沢大学資料館

本ニューズレター第55号で紹介した通り、金沢大学資料館は博物

館相当施設（2016年4月文部科学大臣指定）でありつつ、アーカイブズ機能も有する機関である。同館は2020年、新型コロナウイルス感染予防措置および展示室改修工事のため、3月2日より当分の間休館することとなった。休館の間は常設展示紹介動画で代替していたが、同大学の第2クォーターが始まる6月19日より学内者限定で展示見学を再開した。その後11月9日より、事前予約制による学外者の見学を再開している<sup>1</sup>。事前予約の方法や見学にあたっての注意事項は下記ホームページを参照していただきたい。

[https://museum.kanazawa-u.ac.jp/?page\\_id=49](https://museum.kanazawa-u.ac.jp/?page_id=49)

### （3）熊本大学文書館

熊本大学文書館は、「熊本大学ならびに熊本の地域に関する学術的研究資料の管理を行うことを目的として」、2016年4月に設置された。現在のところ、「学内の様々な記録、本学教職員や卒業生の保有する資料」、「熊本を中心とした地域に関する資料」、「水俣病・免田事件・ハンセン病に関する資料」の3つのテーマを中心とした資料の収集・整理・保存・公開を行っている<sup>2</sup>。

同館は他の大学文書館等と異なり、1回目の緊急事態宣言発令後も感染対策をとりながら開館していた。しかし、2020年5月1日から約1ヶ月の間、対面をとまなう文書館の利用（閲覧、撮影複写、貸出し）を休止し、メール・FAX・電話でのレファレンス業務のみ継続した。同月26日からは利用条件はありながらも対面をとまなう利用が再開している<sup>3</sup>。利用条件の詳細については、下記ホームページを参照していただきたい。

[http://archives.kumamoto-u.ac.jp/info/info\\_20200526.html](http://archives.kumamoto-u.ac.jp/info/info_20200526.html)

#### (4) 東京藝術大学音楽学部大学史史料室

東京藝術大学音楽学部大学史史料室は、同大学上野キャンパス音楽学部2号館内にある。同室の歴史は1981年から2004年にかけて行われた『東京藝術大学百年史』（全11巻）編纂の後を承け、2009年に音楽関係6巻の編集資料の保管活用と新たな資料収集を行う「音楽学部学史編纂室」が開室したことに始まる。その後2011年5月に「総合芸術アーカイブセンター大学史史料室」、2016年4月に「アーカイブセンター大学史史料室」に改組されて現在に至る<sup>4</sup>。

2020年4月8日、1回目の緊急事態宣言が発令され、同大学が9月末までの原則入構禁止を決めたことにより、同室も当該期間閉室となった。その間の利用については原則、ホームページのフォームからの問い合わせに応じてスタッフが資料確認を行うという形式をとった。10月になって開室してからも、フォームからの事前予約が必須となっている。事前予約については下記ホームページを参照していただきたい。

<https://archives.geidai.ac.jp/2020request/>

以上、国立大学アーカイブズのうち、お茶の水女子大学歴史資料館、金沢大学資料館、熊本大学文書館、東京藝術大学音楽学部大学史史料室の現状について見てきた。前回までに紹介してきた機関同様、新型コロナウイルス感染拡大や緊急事態宣言を承けていずれの機関も閉室・閉館しているが、その期間の長短に大きな差が見られる。これは当該地域の感染状況や当該機関の体制が関係していると考えられる。次号では、前回からの継続で私立大学アーカイブズの現状について見ていく。

1 金沢大学資料館「お知らせ」(<https://museum.kanazawa-u.ac.jp/?cat=1>)

2 熊本大学文書館「HOME」(<http://archives.kumamoto-u.ac.jp/index.html>)

3 熊本大学文書館「NEWS&TOPICS 2020年度」(<http://archives.kumamoto-u.ac.jp/topicsAll.html>)

4 東京藝術大学音楽学部大学史史料室「大学史史料室について」(<https://archives.geidai.ac.jp/about-us/>)

(つづく)

## 木下広次をめぐる史料(20)

### — 曾根松太郎『当世人物評』にみる木下広次(2) —

とみおか まさる  
富岡 勝(近畿大学)

前号に続き、曾根松太郎著『当世人物評』(金港堂、1902年)に掲載された木下広次の記事を紹介したい。本日紹介する箇所は、史料的に実証が難しい内容や、筆者の見解と異なる点も多く含まれている。しかし、同時代の曾根から見た木下広次の人物像としては興味深く、少なくとも問題提起としての意味はあると思われる。

#### 木下広次の関心は法学だったのか教育だったのか

曾根は、『当世人物評』のなかで、木下広次が教育方面に関心をもっていた点で独自性があると述べ、その理由として、司法省明法寮の第1期卒業生の多くが法律方面に進んだのに対し、木下広次だけはフランス留学後、東京大学法学部の講師となったことを指摘するとともに父である熊本藩儒木下鞆村からの影響があったと述べている。

ただし、東京大学法学部の講師となったのは、明法寮およびパリ大学での成績が優秀であったためであったからだということができるかもしれない。また、木下鞆村から木下広次がどのような影響を受けたのかという点については先行研究で明らかにされていない。

しかし、当時の人物評が父木下鞆村からの影響を指摘している点については、簡単には無視できないということも改めて感じた。

◎明法寮の第一期卒業生の多くは裁判官となつた、其中に就いて独り木下広次君のみが、直ちに教育の方面に向ふたのは、其の志望の最初から他人と異なつて居たことを見る事が出来る。」

◎彼れは帰朝後間もなく文部省の御用掛となり、東京大学法学部の講師となつた、時は明治十五年の三月で、爾来二十年間一



日の如く教育界に働いたが、多くの法律学士が司法官となり、行政官となり、弁護士となり、会社銀行員となり、或は政治家となつた中に、独り木下君は最初から身を教育の方面に投じ、専心一意此の方面に働いたことは、最も珍しい現象で、是れは彼れの志望が夙に其父の志を継続するに在つたからで有らふと考える<sup>1</sup>。

### 渡辺洪基帝国大学総長のもとでの木下広次

そして曾根は、教育に関心を持っていた木下広次が帝国大学初代総長渡辺洪基のもとで評議員として活躍し、渡辺総長の施策の多くを立案したという評判もあったと述べる。

これは非常に興味深い指摘である。この通りであれば、帝国大学発足時の寄宿舍重視方針に木下広次が関与していた可能性が高いということになり、第一高等中学校の教頭および校長となった木下が皆寄宿舍制を目指したこともスムーズにつながる。「〇〇という評判もあった」というレベルの記述なので、この記述だけではもちろん史料として不十分であるが、気になる指摘である。

◎渡辺洪基君が大学総長となつた時、彼れは其の評議官として能く渡辺君を補佐し、渡辺君の施設は多く彼れの立案で有るとの評判さへも有つた<sup>2</sup>。

### 第一高等中学校教頭・校長としての木下広次

木下広次が第一高等中学校の教頭および校長になった経緯について、曾根は以下のように述べている。古莊嘉門は木下鞆村の弟子であったので、木下広次と古莊嘉門との間で何らかのつながりがあったことが木下広次の第一高等中学校赴任に関係していたことは否定できないであろう。しかし、同時に帝国大学を重視していた森有礼が、渡辺洪基総長を支えていた木下広次に注目していたのかどうかという

点について、つまり森有礼文相と木下広次との関係については、曾根の記述では触れられていない。

◎其内に同郷の先輩古荘嘉門君が、時の文部大臣森有礼君に抜擢せられて、突然第一高等中学校長になつて来た、森君は一夕在る所で古荘君と邂逅して、意気投合した結果、之を抜擢したのだが、古荘君が教育家とは勿論ガラにない話で有るから暫らく立つと適當の相談柱を望む様になり、幸ひ大学に？村先生の子息なる広次君の在ることを発見して、直ちに之に交渉し、遂に広次君を第一高等中学校教頭兼教授と云ふ者にした。

◎年は若かし、学問が十分に出来る上に、人物が至極手堅い方と来て居るから、校内の人望は忽ち教頭に傾て、殆ど校長を圧するばかりになつた。

◎古荘君は心算かに之を予期して居たので、是に於て申分のない相続者を得た積りになり、早速其地位を譲ることを木下君に告げて、自分は其のガラに適する地方官の方に廻はり、木下君は愈々第一高等中学校長となつたが、時は明治二十二年の五月で有る。

◎彼れが第一高等中学校となるや、厳格に学生の品行を取締り、其の優柔に流れんとする氣風を刷新したが、其の標準は自分が曾て教育を受けたる時習館に取つた様に思はれる<sup>3</sup>。

曾根の人物評では、このあと、内村鑑三不敬事件において木下広次が主導的な役割を果たしたこと、父木下鞆村の高弟であった井上毅文相のもとで木下広次が文部省専門学務局長になったこと、井上没後も木下広次が文部省の有力者としての地位を占めて京都大学初代総長になったことなどが述べられているが、これらについても「指摘としては興味深いが史料としての信頼性は高くない」という感想をもった。

信頼性は必ずしも高くないが、無視できない、氣になる史料である。

注

- 1 曾根松太郎著『当世人物評』金港堂、1902年、136頁。
- 2 同前掲書、136頁。
- 3 同前掲書、133頁-134頁。
- 4 同前掲書、134頁-135頁。
- 5 同前掲書、135頁。

## 『久徴館』のめざすもの(9) 談話会と一致会

こみやま みちお  
小宮山 道夫(広島大学)

本誌69号から久徴館「一致会」についてとりあげ、北条時敬の演説を主に取り上げてきたが、一点読者にお詫びをしなければならない。一致会は常に談話会(1889(明治22)年1月12日開催分は演説会と呼称)と同時に開催されることが基本となっているが、『久徴館同窓会雑誌』の雑録(雑報)に掲載される報告記事では、単に「一致会」と立項されたり、「久徴館談話会並に一致会」と立項されたりと区々で、その時々によって概念は揺らいでいるようである。1889年1月12日開催の一致会は演説会と同日開催であるが雑録記事では別々に立項されており、演説会後の懇親会的な会合が一致会として認識されていたことがわかる。即ち北条の演説は厳密には一致会のものではなく演説会でのものとなると訂正したい。ただ北条自身もこの時の演説で「私ハ今日久徴館ノ一致会ニ臨ミ何カナ演説ス可ク予テヨリ約束致シマシタレトモ」と語りだしていることから、一致会と演説会は一体のものと理解していたようである。そして北条の参加した一致会以降、大いに盛り上がり演説会の始まる午後6時から夜の10時や11時まで懇談懇親は続いたことを示す記事が、短いながらも雑録に記載されている。寄宿舎生活に月に一度巡ってくる勉強・討論・懇談の機会は久徴館の人々を活気づかせたことであろう。

さて、この一致会に先立つ談話会の演説について、1891(明治24)年までのわかっている範囲で一覧化しておきたい。各項目の冒頭は雑録の見出し(但し「久徴館」は省略)、開催日、会場、参加者数、時間を可能な限り記載した。一致会および談話会は基本的に1889年1月12日から毎月開催されているはずだが、『久徴館同窓会雑誌』に掲載されていない回も多い事をお断りしておく。

談話会 1888年10月14日 会場不詳 参加者数不詳

藤田子儀「失望ノ説」河島松太郎「名利ノ説」戸水汪君「吉田君ヲ吊フ」中橋徳五郎「封建割拠ノ余臭ヲ論シテ久徴館ノ概況ニ及フ」永山鉄男「実業教育論」

講演会 1889年1月12日 久徴館講堂 50名 午後6時～10時

北川鱗太郎「明治ノ新少年諸君ニ望ム」堀啓太郎「愛国心ト愛君心」北条時敬「慎独ノ学問」

談話会 1889年2月9日 久徴館 50名 午後6時～10時

小林駒太郎「石川県ノ農業」久田済衆「文章論第一章思想の」  
藤田子儀「維新前及維新後ノ壮士」久保田濼納「青年諸君ノ取るべき方針」

談話会 1889年3月9日 久徴館 50名許

志村作太郎「商業教育ノ必要」谷崎安太郎「実業と文明」藤田小儀「憲法上ノ権利」勝木桑松「此頃ノ書生風」

談話会 1889年4月13日 久徴館樓上 50余名 午後7時～10時半

早川法学士「(我邦今日ノ形勢人情日に浮薄文弱に流れ志氣日に消耗せんとするに似たり此ノ如くんは如何ぞ我邦を富強にし欧米に凌駕するに至るを期すへけん此腐敗を一洗して元氣を發揚するノ策如何)」

一致会 1889年5月11日 久徴館樓上 五十余名 午後6時～10時

「演説は催されず」

一致会 1889年6月8日 久徴館樓上 五十余名 午後6時～11時

山花宇太郎「我邦前途ノ盛衰如何」谷崎安太郎「永井喜三郎とは何為る者ぞ」藤井健次郎「孰にか問ひ孰にか答へん」土岐■  
(「イ(人偏)」に「黄」)「石川県人処世ノ方針如何」

一致会 1889年7月13日 久徴館樓上 三十余名 午後6時～9時  
「演舌はなかりし」

談話会並に一致会 1890年10月11日 久徴館 午後6時～  
野村静「修業の心得」金丸四郎「医薬分業の必要」野崎辰次郎  
「社会と国家との区別」高田采松「生存競争」藤井健二郎「浅草  
散歩の■に就きて」

談話会並に一致会 1890年11月8日 久徴館  
竹下和二郎「道徳に就て感あり」高田恒次郎「ゼーゴオールドノ伝」  
早川徳太郎「東西建国考」北濱三十郎「仏教の近況如何」日向  
庄作「験温器の話し」

談話会並に一致会 1890年12月13日 久徴館 午後6時～10時  
半頃  
(討論会) 戸田美三雄発題「久徴館に於て「ロンテニス」存廢の  
可否」富田弥作発題「人物養成に関し官私立学校何れか最も適  
するや」

一致会並に談話会 1891年1月17日 午後6時～11時頃  
進藤久哲「書籍と品格」横井七郎「断然館内諸君に訴ふ」山田  
理三郎「西洋崇拜」野村静「談話会及一致会に就て」内田雄太  
郎「をはなし」岡本桂次郎「元寇記念碑の披露」藤井健次郎「日  
本と西洋」

一致会並に談話会 1891年2月14日 久徴館 午後6時～10時過  
宮永剛太郎「裏意気」北村忠四郎「衛生」内田雄太郎「をはなし」  
永井梅次郎「政治と道徳との関係」富田弥作「愛国心」

談話会及一致会 1891年5月9日 午後6時～10時  
根堂乙吉「早川館長の自修択友の諭示に付ての意見」渡邊久  
太郎「我輩の方」窪田正吾「名誉に付て」中橋徳五郎「都会は  
豪傑を生するの地に非ず、演述法を諭す」

談話会並に一致会 1891年6月13日 久徴館 午後6時～10時

鈴本貞太郎「宗教」近藤乙吉「日本人ヲ論シ速成及心酔ノ弊ニ  
及フ」遠田延吉「帰省ノ学生」橋本哲太郎「苦樂」

談話会並一致会 1891年10月26日 久徴館内 午後6時～10時

清水実隆「会の利用を望む」松本平太郎「頼むへし頼むへからず」  
近藤乙吉「民法人事編に就て」岡本監輔「(千島群島の形勢)」

(続く)

## 体験的文献紹介(23)

### — 実科中学校と実科高等女学校 —

かんべ やすみつ

神辺 靖光(ニューズレター同人)

勅令省令の法規を踏まえた戦前の中学校・高等女学校の教育課程変遷史を書こうと意気込んでみたものの、力量足らずで結局、時期としては明治末年までが精一ぱい、内容も法規の説明とその概念図作成に止まった。論文としての論理のたて方も文章も下手である。しかしこれ<sup>へた</sup>で引き下ってはいられない。折角のチャンスであると思って「紀要4号」以下の論文を考え、中等教育史上のある時期のトピックを研究することにした。すぐに思い浮かんだのは実科中学校と実科高等女学校である。実科中学校については『明治以降教育制度発達史第3巻』にその法規が載っているがその実態はよくわからない。当時できつつあった実業学校とも違うようである。また民友社の『教育五十年史』では大正期の文部大臣岡田良平が次のように評言している。`実科中学校は井上毅文相がはじめたものだが、僅に一二校に過ぎず失敗に終わった。これは外国語をやめて普通学の外的実業学科を加えようとするので、これでは上の学校へ行かれぬので科外に英語を学ぶという訳で実科中学の精神は無視されてしまった。`。これだけの評言ではわからないのでこれを調べることにした。

実科高等女学校は私の少年時代の実見聞でおぼろげながら知っていた。私は昭和の初年、東京府北多摩郡立川町の尋常高等小学校に通った。この小学校は尋常科と高等科を備えた町で一番大きい小学校であったが、校舎の一角に畳敷の大きい部屋があり、数十人の`お姉さんたち、`が一日中、縫い物をしていた。当時、小学生たちは半分は和服、半分は洋服であったが、このお姉さんたちは全員和服であった。通学はその和服姿で針箱らしきものを携え、時には張り板をかついでいた。みなお喋りで元気で薄暗い畳敷の教室と似つかわしくなかったが、時に校庭の一角に鍋釜を持ち出して騒ぎながら調理実習をしていた。学童たちはめずらしがって群がり見物したものである。ある時、父にそのお姉さん達



のことを聞いたら「あれは実科女学校だよ」と教えてくれた。当時、町に陸軍近衛飛行連隊ができ中島飛行機会社が陸軍の航空機を作り始めた。よって陸軍将校や技術者、会社のサラリーマンが急に増えだした。町は旧来の農家と職工と駅前が増えだした小売商店と雑多な様相を現わしていた。陸軍将校と技術者サラリーマンの娘たちは八王子にある府立第四高女か中央線沿線にできた私立高等女学校に通っていた。みなセーラー服の制服で美しくハイカラであった。小学校に附属した実科女学校となんと違うことか。実科女学校については母に対する思い出もある。ある時、古いアルバムから母の卒業記念写真を見つけた。わら<sup>むしろ</sup>蓆に30人ばかりの娘が正座し中央に羽織・袴の老人と老婦人が座った写真である。老人は校長先生、老婦人は実科の裁縫師匠であるという。母方の祖父は下町の大工の棟梁<sup>どうりょう</sup>であったから浅草の実科女学校に入ったのだという。ある時、用事で来訪した父方の伯母にこのことを話したら「お喋りっ子、ときつく叱られた。父方の祖父は官吏でその娘たち即ち伯母達〔たち？〕はみな虎の門の女学校（私立東京女学館）の出身者であった。母は伯母たちに劣等感を抱いていたのである。想えば伯母たちの話は文学や芸術の高級な話で、一日中針仕事をしてきた母とは話が合うはずがなかったのである。こうして私は小学校卒業頃までに女学校には二種類あって一つはハイカラで高級な高等女学校、一つは田舎くさい下等の実科女学校という概念ができていたのである。さればここで実科高等女学校を教育史として研究せねばならないと決心した。

実科中学校は明治27年6月の「尋常中学校実科規程」（文部省令13号）によって始った。19年にできた尋常中学校は上級の学校への進学と地域の実業に就くためという二様の目的を持っていた。そのため進学者には英語をはじめ第2外国語を履修させ、就業者には普通学科の外、農業をはじめ商業や工業を学ぶよう教育課程が組まれていた。しかし卒業生の多くが進学した訳ではなく実業に就く者が多かった。当時の中学生は士族か豪農豪商の子弟であった。尋常中学校卒業の肩書があれば郷村の指導者として充分であった。そこで24年、「中学校令」を改正して農業・工業・商業の専修科を置くことができるとした。しかし専

修科を置いた学校はごく少なかった。土着の親はそんな実学は実地に習わせればよいぐらいに考えていただろう。しかし諸統計と法規によって教育の実態を知っている文相井上毅は上級学校進学者の少い尋常中学校に進学一辺倒の教育課程を許すことはできなかつたのであろう。ここにおいて尋常中学校に一年生から通年で、または四年生五年生の2年間、農工商の実科課程を置いてもよいという実科規程が発せられたのである。しかしその実態は5年制の実科中学校も2年制の実科課程もそれぞれ全国で各2校というもので教育現場の教員・生徒から嫌われたのであった。

実科高等女学校は明治43年10月の「高等女学校令中改正」(勅令424号)と「高等女学校令施行規則改正」(勅令4号)で始まった。この場合の「実科」は「主トシテ家政ニ関スル学科ヲ修メントスル者」を対象とする女学校で家事・裁縫に多くの授業時間を当てている。しかし修身と国語を重視する事では裁縫女学校と異質である。当時、高等女学校は大都市にあった。これは中学校も同様であるが、男子が故郷を離れて遊学するのは江戸時代以来の習慣であったが、女子は親元で養育されるのが健全な家庭とされていたので実科高等女学校はこれに合わせて地方農村や中小都市型の女学校として構想された。それ故、事情の違う各種の家から通えるよう入学資格、修業年限も3段階になっており校舎も尋常高等各種の小学校に附設してよいと設置し易くできていた。かくて実科高等女学校は法令公布後直ちに普及し明治末年には90校を数えるに至った。しかし小規模校のため生徒数は高等女学校に遠く及ばなかつた。

この論文は中学校・女学校の実科課程に焦点をしばったことで教育課程の変遷を記した前論文よりはよくできていると多少の自信を持っていた。この論文は土屋忠雄先生門下の日本大学の教育史研究仲間であられたらしく日大出身の研究者による実科課程の研究が現われた。山村俊夫『日本における実科中学校・実科高等女学校史研究』(2001年、啓明出版)はその代表作で、序文で、神辺の研究から出発したことを明記し、各處で私の論文を引用している。嬉しいことだと感謝した。とは言え実科中学校研究は私の創意発見ではない。実科中

学校が教育史研究上、重要事項たることを示したのは海後宗臣門下の菊池城司氏である。1968年、海後宗臣編、海後門下7名による共同研究の『井上毅の教育政策』（東京大学出版会）が公刊された。その中に大阪大学教授・菊池城司氏の「中等教育」があり、「第5節尋常中学校の実科教育」がある。私はこれを読んで中学校実科課程のことを知って開眼し、これの史的研究を志したのである。中学校実科課程研究の創始者は菊池城司氏である。

日本近代教育史研究における海後宗臣氏の業績は巨大で紹介するのは<sup>はばか</sup>憚られるが、氏が門下生と共同で研究した成果を公刊したものをあげよう。いずれもその時期その時代の学校教育を知るためには学ばねばならぬ必須の事項が明らかにされている。近代日本学校史研究者必読の書と思う。

1965年『森有礼の思想と教育政策』（東京大学教育学部紀要第8巻）

1968年『井上毅の教育政策』（東京大学出版会）

1960年『臨時教育会議の研究』（東京大学出版会）

1975年『戦後日本の教育改革』全10巻（東京大学出版会）

## 参考文献

民友社『教育五十年史』

桜井役『女子教育史』

山村俊夫『日本における実科中学校・実科高等女学校史研究』

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』  
刊行要項(2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

---

## 短評・文献紹介

---

小宮山宏さん(1944年生れ、工学者)の半生を綴った「私の履歴書」『日本経済新聞』で、「大学2年夏の関西旅行 岐路に おじの勧め 理1と化学工学」(私の履歴書④; 2020年11月4日)を興味深く読みました。1963年東京大学に入学して、教養学部での授業はご本人によれば真面目に受けたといいます。面白い講義ももちろんあったそうですが、講義への期待がかなり大きかった分、「しかし、面白いものは少なかった。化学でも物理でも最初に水素の波動方程式がでてくる。しかし、深くはやらない。ただ、数式を解こうなる、という説明で終わ」って、とても残念だったとのこと。そんな小宮山さんが大学2年生の夏休み、仲がよかった学生らと関西方面への旅行に出かけ、途中岡山のエンジニア肌のおじさんの家へ立ち寄り、おじさんと進路について相談したことが小宮山さんの転機となったそうです。当時の小宮山さんは、とくにやりたいことがあったわけではなく、なんとなく応用物理に進もうと考えていましたが、おじさんから「応物はどこにいてもやることはあるが…応物などについても仕方ない、やめておけ」と力説され、おじさんが働く、さまざまな製品の原料を連続して製造する石油化学プラントといった化学工業を勧められ、友人らと一緒に化学工学科へ進級することになったのだと。小宮山さんによれば、「2年の夏の関西旅行は、人生の一つの岐路になった」といいます。きっと小宮山さんにとって、生き生きと働いていたおじさんの姿は眩しいながらも尊敬に値し、そんなおじさんから愛ある助言を受けて心揺さぶられたのでしょう。(谷本)

タイトルにひかれて古書店で買った(ブックオフの中では割引率は低かったので人気作家のようだ)、今野敏『寮生 — 一九七一年、箱館。—』(集英社文庫、2017年)を読んだ。この作品は、著者が実際に暮らした1971年の箱館ラ・サール高校の寮が舞台である。寮の伝統行事がくわしく描かれ、それがこのミステリー作品のなかで重要な役割を果たしている。寮は三棟に分かれ、学年ごとに棟に分かれ、一年生はおよそ200人分の2段ベットが並ぶ大部屋生活だったそうだ。これは部屋割りとして、やや珍しい事例かもしれない。大部屋生活はプライバシーが守れないが、自習室やレコード室には消灯時間がなく、ゆるやかな集団生活が行われたらしいことが物語から伝わってくる。戦後のカトリック系私立高校の寮の物語として、吉野さんのテーマである「カレッジ・ノベル」にやや近い作品といえるかもしれない。気軽な読書を通して研究テーマの寮生活や自治の事例に触れることができて、少しトクをした気分だ。(富岡)

---

## 会員消息

---

子ども時分の夏休みの宿題などの代表格に、読書感想文がまず挙がるだろう。そんな読書感想文ならぬ、アニメ感想文2020(自由定型)が昨年秋に、あるアニメサイトで募集されていました。堅苦しいイメージのある読書感想文と比べ、ちょっと面白い企画だな…と思い、つい歳甲斐もなく私(ペンネーム:ムネちゃん)も投稿してしまいました。自身がそんな企画に投稿していたことも忘れかけていましたが、その結果が先ごろ発表され、なんと幸か不幸か?、私の投稿感想文も採択掲載されました。“夏を振り返るなら、この作品はやはり外せないかな”という自身の結語も、今思い返すと恥ずかしい限りですね。(谷本)

今月はお暇を取らせていただいた。今年度から科研費を取っているので、それに関わる地方での史料調査を保育実習の合間にしなければならなかったからである。

しかし、この状況下での史料調査は厳しい。図書館や公文書館のような、史資料の公開を業とするところに行くのが精一杯である。現地の一次史料を用いることを売りに研究費を獲得したのだから、学校文書を見たいののだが、さすがに今は頼めない。いつになったら行けることやら。

このような限られた中でも細々と調査を進めているが、日本学術振興会に提出する書類にある「進捗報告の達成度」は、どう鼻屑目に見ても「遅れている」にせざるを得ない。そこで、その挽回を期して、次号からは再び新制高等学校の専攻科・補習科の問題を扱うことにしたい。

カレッジノベルの研究は老後に向けた種まきだったのだが、しばしお預けである。

(吉野)

1月24日(日)に国立歴史民俗博物館において、博学連携フォーラム「学校と歴博をつなぐ実践報告会」が開催された。筆者も昨年度と今年度の2年間にわたって、博学連携研究員としてお世話になっているため、成果報告を行うことになった。発表タイトルは、「総絵から時代の転換を理解する日本史探究授業開発」である。筆者は、緊急事態宣言を踏まえて、在宅からのオンライン参加という形式をとったが、現地に集合できる先生方は、現地にて報告を行った。詳細は、報告書となり刊行される予定である。

2年間にわたって、国立歴史民俗博物館学校対応の先生方や、博学連携研究員の皆さまにお世話になりました。ありがとうございました。(八田)

桜は入学式の代名詞、という感じだったのが、すっかり卒業式の花になったような今日この頃ですが、私も修士課程の学位記をいただいてまいりました。進学予定なので修了の実感はあまりなかったのですが、修士で終える友人がガウンなどを着ているのを見て別れの季節を実感していました。ところで、最近は何やら恐れて手を出していなかった戦前日本の公民教育論について調べています。普段調べている占領期とは大きく異なる表現に少々面食らいつつ、占領期にもよくみた論理構造を垣間見ることもあり、日々自分の歴史的なものの見方が相対化されていく思っています。今号は論文投稿の関係もあり執筆できませんでしたが、来月以降はコンスタントに投稿できればと考えています。(猪股)

ミネルヴァ書房の『小学校教育用語辞典』（編集代表：細尾萌子・柏木智子）がまもなく完成・刊行という連絡が届きました。小学校教育だけでなく、教育の幅広い分野を扱いながら、初学者むけに平易な言葉で記述されているので、かなり使い易くて内容も意欲的な辞典になるのではないかと思います。

<https://www.minervashobo.co.jp/book/b563426.html>

この辞典には編集代表の細尾さんから声をかけていただき、「特別活動」の章の中間まとめ役として編集に参加しました。COVID-19への対応に終始していた感が強いこの1年間で、しんどい中でも関わった仕事が形になるということは、この辞典といい、ニュースレターといい、嬉しく感じています。(富岡)

知命を迎えてしまいました。孟子に「知<sub>レ</sub>命者不<sub>レ</sub>立<sub>二</sub>乎巖牆之下<sub>一</sub>（めいをしるものはがんしょうのもとにたたず）」天命を知った者は自己をたいせつにするから、くずれかけた石垣の下に立つような危険なことはしない、とありますが、我が身は常に崖の下にあり、連日上から何か落ちてくるのを余儀なくされています。早く実質的な知命とならねばと焦る日々です。(小宮山)

本ニュースレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。